Ｈ２０．９．１９　読売新聞

有権者の自覚育てて

県立2高で選挙出前講座

立ち会い演説や模擬投票

実際に国政選挙などで用いられる投票箱へ票を入れる生徒ら（越前市の県立武生商業高校で）

　将来、有権者となる高校生に選挙への関心を高めてもらおうと、県明るい選挙推進協議会は、武生商業（越前市家久町）と大野（大野市新庄）の県立2高校で、「明るい選挙出前塾」と題した啓発イベントを行った。

　若年世代での投票率低下が目立つことから、同協議会が毎年、県内各地の中学校や高校に出向いて実施している。

　武生商体育館で開かれた出前塾では、生徒約430人が参加。同協議会の中村保之会長が「選挙は、自分たちが暮らす社会や地域の未来を決める行動。人ごとではなく、自分の問題だと思ってほしい」と講演した。

　衆院選などで用いる投票用紙や投票箱を使って、生徒会役員の信任投票も実施。会長に1人、副会長に2人の生徒が立候補し、それぞれが「生徒や先生の声を聞き、良い学校にしたい」などと、本番の選挙並みに立ち会い演説を行った。

　参加した生徒らは演説内容を吟味した後、信任するかしないかを「○」か「×」で投票用紙に記入し、投票箱へ入れていった。

　同校3年、仲谷菜摘さん(17)は「初めてだったけれど簡単だった。20歳になったら、必ず投票に行きたい」と話していた。